

雷ギヲ山城の調査

—第152-4次

1 はじめに

本調査は、個人住宅の新築にともなうものである。調査地は雷丘北方遺跡から約80m北に位置し、村道耳成線の西側に面している。

調査区の北西部に隣接するギヲ山は、中世には山城として利用され、雷ギヲ山城として『日本城郭大系』に掲載されている（児玉幸多・坪井清足監修『日本城郭大系』第10巻、新人物往来社、1980）。また、調査区一帯は古くから大官大寺式の瓦が出土・採集されることでも知られており、寺院（雷庵寺）もしくは瓦窯の存在が指摘されていた。現状では、これらに関連する遺構は検出されていないものの、調査区から50m北に位置する第81-7次調査では7世紀前半から平安時代にかけての遺構が検出されている（『年報1997-II』）。

調査区は長さ約9m、幅約4mで設定し、その後北西隅を、1.3m幅で北に1.5m拡張した。調査面積は38㎡。調査期間は2008年10月2日から同月9日までである。

2 検出遺構

基本層序 調査区の基本層序は、①耕土（10～20cm）、②床土（10～15cm）、③灰褐色粘質土（地山の凹凸を均すための薄い整地土）、④地山（明橙色粘質土）となる。遺構面は地山直上で検出した。

検出した遺構には、東西溝1条、南北溝1条、柱穴2基、土坑2基および小穴、耕作溝がある。以下、主要な遺構について述べる。

東西溝SD4320 調査区の北肩を東西に流れる溝。調査区西端から6.6m東で北に向かって折れ曲がり、後述するSD4321には合流しない。溝の北肩を確認するために調査区北西隅を約1.5m北へ拡張したが、溝幅が広く拡張部分で検出することはできなかった。溝の深さは掘込面である地山から約1.6m。溝は掘込面から30～50cm落ちた部分でやや緩やかに傾斜する面をもち、そこからさらに1m急激に落ち込む。溝の底面から約1mの厚さで植物遺体を大量に含む沼状の堆積層を形成しており、溝が機能していた当時は水を湛えていたことがわかる。溝

幅は不明であるが、拡張区北辺付近がSD4320の中心と仮定すると溝幅はおおよそ3.6～4mになると思われる。12～14世紀に位置づけられる瓦器碗や羽釜が出土した。雷ギヲ山城をめぐる水濠と考えられる。

南北溝SD4321 調査区の東辺を南北に流れる溝。溝の東肩は調査区外になるため確認できていないが、検出した部分から推定すると溝幅は1～1.5m程度になると思

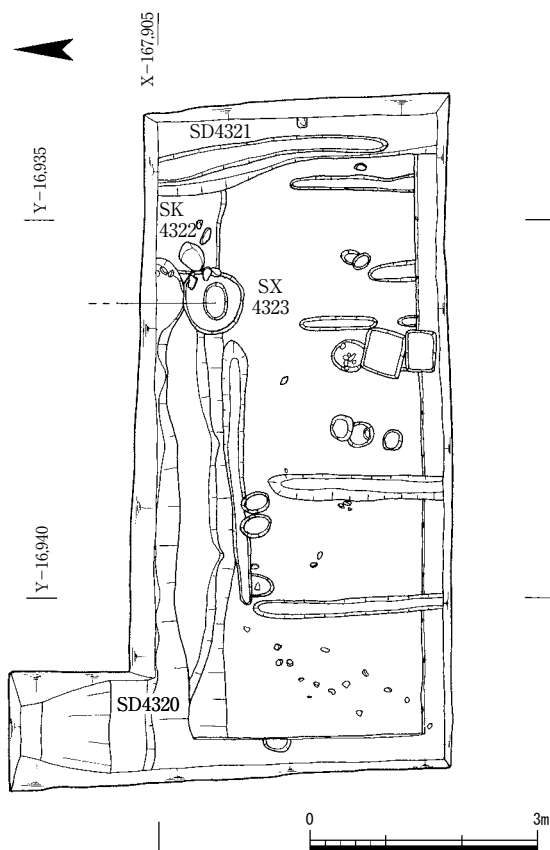


図91 第152-4次調査遺構図 1:100

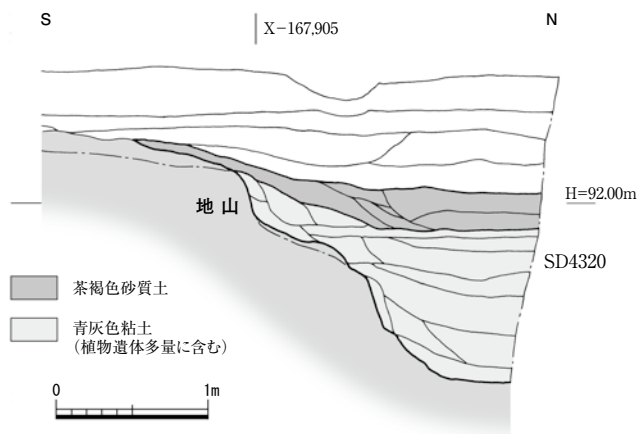


図92 SD4320南北断面図 1:50

われる。深さ約40cm。溝の埋土には土器を少量含むものの、すべて小片で時期は不明である。

土坑SK4322 調査区東北隅から約1.5m西に位置する。SD4320およびSX4323に壊されており、調査区の中ではもっとも古い遺構。柱穴の可能性もあるものの、土坑の一部が北壁にかかっていることもあり、柱抜取穴は認めることができなかった。直径85cm、深さ30cm。

柱穴SX4323 調査区の東北隅から、約2m西に位置する。1基のみ検出した。柱穴の掘方は一辺80cm、深さ50cm。柱穴の規模からみて、古代の遺構の可能性はある。SD4320に壊されており、柱穴の東・西および南延長線上には次の柱穴が認められなかった。従って、SX4323を起点にして北へ延びる南北塀、もしくは東延長線上の柱穴がSD4321によって壊されたとすれば、掘立柱建物の南西隅柱の可能性も考えられる。

3 出土遺物

瓦 類 調査区からは瓦類の出土はごくわずかである。瓦類は、いずれも古代のもので、丸瓦4点(400g)、平瓦14点(1470g)が出土した。(石田由紀子)

土 器 調査区からは整理箱1箱分の土器が出土した。中世の土師器、瓦器が主で、7世紀から奈良時代にかけての土師器、須恵器のほか、製塩土器や近世陶磁器が少量出土している。SD4320からは、土師器小皿、羽釜、瓦器碗が出土した。1・2は土師器小皿。口縁部を強くヨコナデする。3～5は瓦器碗。4は器壁が薄く、退化した高台を貼り付ける。5は高台が低い台形を呈する。最下層出土。6・7は羽釜。6は口縁部が強く外傾し、端部を折り返す。7は口縁を折り返さず、丸くおさめる。これらは12～14世紀代のものである。(小田裕樹)

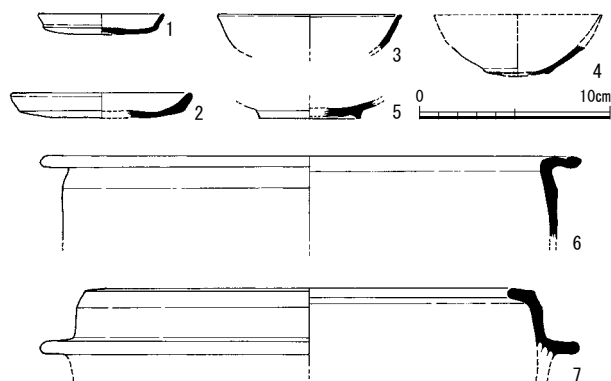


図93 SD4320出土土器 1:4

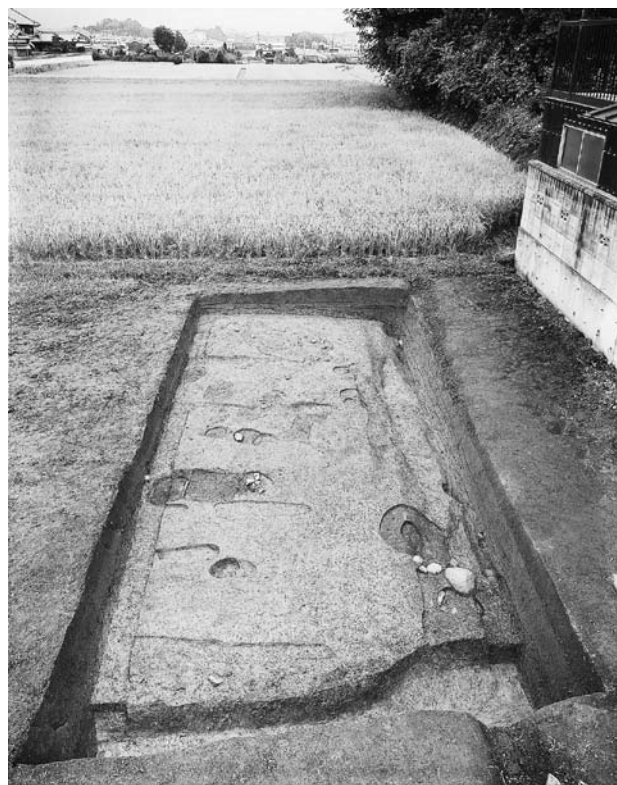


図94 第152-4次調査区全景(東から)

4 まとめ

今回の調査では、古代のものと考えられる柱穴は検出したものの、建物などは明確には確認することができなかった。しかし、雷ギヲ山城の水濠と考えられる遺構を検出することができた。

雷ギヲ山城は、城主、築城年代、存続期間など、詳細は不明の城であった。しかしながら、城をめぐる水濠SD4320が検出されたこと、しかもSD4320から12～14世紀代の土器が出土したことで、雷ギヲ山城の城郭構造および存続期間に関する手がかりを得ることができた。雷ギヲ山城が機能していた時期は、比叡山の末寺となった多武峰と興福寺とが対立し、十数回もの相論・武力衝突が起きており、飛鳥地域でも東部の坂田、細川、冬野などが戦場となっている(吉川真司「中世の飛鳥」『続明日香村史』明日香村、2006)。したがって、多武峰へと向かう要所にある雷ギヲ山城も、あるいはこのような争乱と関わりがあるのかもしれない。

以上、今回の調査は狭小な調査区であったが、中世の飛鳥地域を考えるうえで重要な成果を得ることができたと言える。(石田)